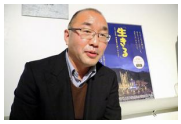
朝日新聞
DIGITAL

あのとき、声を上げていれば　震災遺族の記録映画を撮った監督の後悔

阿久沢悦子　2023年2月14日 20時00分

慰霊の竹灯籠（とうろう）をともす男性＝映画「生きる」から（C）2022 PAO NETWORK INC.



ガシャン、と勢いよく門扉を閉める音が、耳に残っていた。今から30年以上前の記憶になる。

1990年、兵庫県立神戸高塚高校で遅刻指導で教諭が閉めた門扉に頭を挟まれ、女子生徒が亡くなる事件が起きた。テレビディレクターの寺田和弘さん（51）が卒業してから4カ月後のできごとだった。

在学中から感じていた恐れ

校門指導は寺田さんの在学中からあった。

教諭らが門扉を閉めた力は事件の検証でヘルメットを破損するほどの強さだとわかった。怖いと思っていたはずなのに、誰も「やめて」と言わなかった。3年後、教諭は業務上過失致死罪で有罪となり、事件は管理教育を問い直すきっかけになった。

寺田さんは高卒後、カーレーサーになり、阪神大震災当時はトラック運転手として働いていた。25歳から番組制作会社のディレクターとして、テレビの報道番組に携わるようになり、改めて事件を振り返った。

「もし僕らが声を上げていれば、彼女は死ななかった。黙っているのは加害者になることだ」

以来、異議を唱える人がいれば、小さな声でも社会に届けることが自分の仕事と心がけるようになった。

ビラ配りで逮捕された人から言論の自由について考えたり、DNA鑑定を捜査機関が独占していることに警鐘を鳴らしたり。最近はアイヌの先住権問題に取り組む。

東日本大震災による津波で多くの児童が犠牲になった宮城県石巻市立大川小学校の遺族らのドキュメンタリー映画「生きる」が18日に公開されます。寺田さんが初めて監督を務めた映画です。学校で子どもが命を落とすとはどういうことか？ 遺族と向き会いながら撮影した思いを聞きました。

その心がけは、映画制作にも引き継がれた。

東日本大震災による津波で児童74人が死亡・行方不明となった宮城県石巻市の大川小学校。自身初の監督としてその遺族らを追ったドキュメンタリー映画「生きる　大川小学校　津波裁判を闘った人たち」が2月18日に公開される。

大川小の児童たちはなぜ逃げ遅れたか。遺族の一部は「子どもの死の真相を知りたい」と国家賠償請求訴訟に挑んだ。

仙台高裁は、地震発生前に避難場所を定め、避難訓練をし児童の安全を確保すべき義務を怠ったとして、国、県、市の「平時からの組織的過失」を認めた。

勝訴となった一方、遺族は「金が欲しいのか」などの中傷や「殺すぞ」という脅迫を受け、傷つく。

声を上げる人をたたく社会の理不尽さ

3年前、「遺族が前を向けるように」と弁護団に頼まれ、映画化を提案した。

当初は遺族全員が反対した。石巻で開かれる原告団会議に、毎回足を運び、胸の内に耳を傾けた。

「撮ってもいいよ」という人が徐々に増えた。最終的に8組の遺族が撮影に応じた。

映画は遺族が市教委の説明会や事故検証委員会などを撮影した約200時間分の映像を軸に編集した。

新たに撮影した部分では演出をせず、震災10年後の遺族の姿をそのまま見せることに徹した。ナレーションもない。

「声を上げる人をたたく社会の理不尽さを、観客に自分ごととして考えて欲しかった」

33年前の事件への回答

「わかりにくくてもいい。ドラマチックな筋書きを作ったり、遺族を『素材』にしたりすることだけは絶対にしてはいけないと思った」

娘を亡くした夫婦が、学校の廊下に残された名前シールを指でなぞり、つぶやく。

「昔のことを踏まえて、風通しのいい意見の言える学校になれば、娘も少しは報われる」

ラストシーンでは、子を亡くした父親が高校生に体験を語った。「子を追って何度も死のうとした、でも今、生きようとしている」

そして裁判官の言葉を高校生に伝えた。

2度、かみしめるように。

「学校が、子どもの命の最期の場所になってはならない」

声を上げた人がつかみ取った真理であり、33年前のあの事件への回答でもある。

映画「生きる　大川小学校　津波裁判を闘った人たち」について

映画「生きる　大川小学校　津波裁判を闘った人たち」は124分。音声ガイドや字幕版によるバリアフリー上映もある。

2月18日から新宿K’s　cinemaで公開。その後の公開日は2月25日=大阪・第七藝術劇場▽3月3日=岩手・盛岡ピカデリー、香川・ソレイユ、福岡・KBCシネマ、熊本・denkikan▽3月4日=愛知・シネマスコーレ▽3月5日=鹿児島・ガーデンズシネマ▽3月10日=長野・長野相生座ロキシー、京都・京都シネマなど。

地元宮城では3月17日から、フォーラム仙台で公開される。

詳しくはホームページ（ https://ikiru-okawafilm.com/ ）へ。（阿久沢悦子）